

令和3年度前期アーバンデザインスクール第2回実績報告書

1. 開催日時

令和3年7月9日（金） 18時30分～20時00分

参加人数: UDCBK での視聴: 2名、オンライン: 22名=計23名

※オンライン会議システムとUDCBKのオープンスペースでの視聴を併用

2. テーマ

「都市を構想する」

- 令和元年度アーバンデザインスクール（前期）『アーバンデザイン講座』の講師が再び登壇し、多角的な視点からアーバンデザインについてさらに深く学んでいく全5回シリーズ「アーバンデザインの探求」の第2回目である。
- 第2回目の本スクールでは、講師の野原卓氏に話題提供いただきながら、及川清昭氏（UDCBK センター長、立命館大学理工学部特命教授）のコーディネートのもと、都市をデザインする際に考えるべき「構想」について、都市ビジョンを描く場合やスモールスケールで空間ビジョンを共有する場合など、様々な時空間的広がりの中から展望する。

3. 話題提供者

- 野原 卓 氏

横浜国立大学大学院 都市イノベーション研究院 准教授



4. 話題の概要

野原氏による講演

ア. アーバンデザインセンター

- アーバンデザインセンターとは、課題解決型 = 未来創造型まちづくりのための公・民・学連携のプラットフォームである。
- アーバンデザインセンターは、全国に 23 か所（2021 年 4 月現在）あるが、そこは、行政や公共的な組織・民間企業や市民・大学の専門家や学生、その他色々な人がフラットに連携して交流していく活動の場となっている。

イ. アーバンデザインと都市の構想

- 都市デザインが有する 7 つの要素として、以下のものがあると考えている。
 1. 都市の文脈を解読する
 2. 都市空間の将来を構想する
 3. 人間的な都市空間を設計する
 4. 主体同士のチカラを調整する
 5. 戦略的なプロジェクトを実装する
 6. 多主体とともに協働する
 7. 都市空間全体を経営する

都市デザインでは、都市の歴史や文脈をちゃんと読み解き、実際の空間を設計していく必要がある。そして、色々な人を巻き込んで調整しながら、単にデザインを描くだけでなく、プロジェクトを本当に動かしていくことが持続的なまちの経営には重要になる。

- 「歴史」という言葉を聞くと、古いもの、遠いものというイメージであるが、現在は一瞬のうちに過去になり、その積み重ねが歴史である。我々の暮らしも過去に作られたものの集積によって成り立っている。その意味で、現在と過去は密接につながっている。また、未来を決めているのも現在の我々である。つまり、現在の我々が過去の蓄積を読み取って、未来を決めているのである。

ウ. 都市計画

- 都市とはそもそも、人間がともに生きる場所である。人間は生きるために色々なものを交換したり、分配したりして生きている。それを実現する場が都市である。
- このことは、「都市」という漢字にも表れている。「市」とは、市場・マーケットのことであり、価値交換の場を示す。「都」とは、「宮処（みやこ）」つまり、天皇の居場所であり、一度譲り受けたものを行き届かないところへ再配分するというを示している。この二つの機能によって、ともに生きることを実現するための装置が都市であると言える。

- 古代ギリシアや平安京などの幾何学的な都市は、為政者の力や意図が明確に反映された都市とすることができる。
- 近代になり産業革命が起こった後、都市に人とモノが集中するようになり、人口の過密、大気汚染による公害、スラム発生による衛生悪化といった三大都市問題が顕在化してきた。これらの問題を解決するために生まれてきた技術が、都市計画である。
- 新しい都市の姿を描くときに、色々なかたちや計画が提示された。そこでは、従来の「統治者」がつくる明確な意図があるまちから、「市民」が皆で豊かな都市の在り方を考えてつくるまちへの転換が起こった。
- ただし、皆で考えるためには、明確に見える都市のイメージが必要になってくる。例えば、丹下健三が提唱した「東京計画 1960」などがそのイメージに該当する。議論の前提として、こういったイメージを皆が共有し、考えていく過程が重要になる。

エ. 方向性を重ね、力を合わせる

- 現在の日本は、人口減少社会となっている。日本創生会議が 2014 年に提出した試算によると、896 の自治体が今後、消滅する可能性があるということである。人口が少なくなる社会では、縮減しても豊かに暮らせる都市について、皆で力を合わせて方向性を定めていかななくてはいけない。その意味でも、構想（ビジョン）が大切になってくる。
- 最初にビジョン（グランドデザイン）を描いておくことで、何かのアクションを起こすときに、その活動がビジョンの大枠に入っているかどうか、方向性が正しいかを常に確認することができるようになる。また、何か壁に突き当たった時にも、それぞれの主体がビジョンを共有していれば、プロジェクトの修正や継続も行うことができる。
- イームズ夫妻によるプレゼンテーション‘Powers of Ten’という考え方によると、同じ場所を映した写真でも、倍率を 10 倍変えることで、見え方が異なってくるということになる。同様に、空間や場所が持つ意味は、どのスケール（惑星レベル、都市レベル、人間レベル、細胞レベルなど）で考えるかによって違ってくる。例えば、都市の交通と空き家というのは関係のない問題のように思われるかもしれないが見方を変えると密接につながっている可能性もある。
- 国土交通省が提唱する「コンパクト + ネットワーク」という考え方は、人口減少社会における都市の在り方のひとつのかたちであるが、その考え方を具体的に自分たちのまちに落としてきた時、何が必要となるかということが具体的に見えてくる。有名な事例では、まちの中心といくつかの拠点をつなぐようなまちづくりを行った富山市での実践がある。
- 東京都大田区では、アーバンデザインセンターが中心となって、「おおたクリエイティブタウン構想」というものを掲げている。それは、大田区の特徴である、ものづく

りを活かしながら、技術を創造の力で生活の中に入れ込んでどんどんとまちの価値が上がっていくような個性あるまちをつかっていこうということである。このビジョンのもとでは、大田区が紡いできた最先端のものづくりの歴史と文化といった文脈も読み解いている。

- 通り道一本から始まる構想というものもある。横浜市の「みなと大通り」の将来像として、歩きやすさや居心地の良さを考えた道にしていこうというビジョンがある。
- ポストコロナの都市のあり方を考えてみると、例えば、パリ市の「15分シティ構想」のようなものが参考になる。これは、自転車で15分以内の範囲で生活に必要なものやサービスを獲得できるようにしようというものである。実際にこのようなまちにするためにはどのようにその構造を変えていかななくてはいけないか、具体的に考えやすくなる。

オ. 未来に向けた構想の事例

- 岩手県大野町では、過疎化が進んでいた中、40年前に「一人一芸の村」として、大野木工と職人を育成することを目標とした。そして、「おおのキャンパス」という産業デザインセンター兼道の駅を整備し、観光客を呼び込むことに成功した。その後、このキャンパスを拠点に各集落とも連携して地域力づくりを進める「おおの・キャンパス・ビレッジプラン」ができた。
- 千葉県柏駅周辺のグランドデザインを描く時には、まず、その地域にどのようなものがあるのかを数値的に調べるところを行っている。そうすると、既に住宅として使われている割合が高く、商業を復活させるという当初思い描いていたビジョンだけでは少し困難であり、メリハリをつけて、住宅も受け入れながら重要な部分に商業を配してゆくべきであるということが判った。
- また、新しいまちのイメージがなかなか湧いてこないという時は、社会実験を試してみ、その結果を検証して、将来像につなげていくことという方法もありうる。

カ. 公×民×学の連携を図る

- アーバンデザインセンターでは「公×民×学」という言葉を使うことがあるが、アーバンデザインセンターでは、それぞれの立場や個別では解決できない課題を一緒に力を合わせて考えていこう、というフラットな連携のあり方を大切にしている。アーバンデザインセンターを多様な主体で合わせて上手く動かしていくには将来ビジョンというものが大切になってくる。
- ビジョンを実現していくためには、色々な人を動かしていく必要があるが、アーバンデザインセンターにはその役割がある。そして、ビジョンを描くことと、アクションを実効性のあるものにしていくということは表裏一体の関係でもある。

キ. 横浜市における構想とまちづくり

- 横浜市は、1923年の関東大震災、1945年の横浜大空襲、戦後1960年まで続く米軍による接収という三つの断絶によって、まちづくりを阻まれてきた歴史があるが、その都度、「復興力」を示してきた。
- 例えば、震災の瓦礫を集めてできた山下公園は、いわば、震災復興公園ともいえる。また、復興案検討の過程では、緑地の重要性が唱えられた。そして、海辺との接点として公園が整備された。
- また、横浜大空襲の後、横浜市では防火建築帯（横浜防火帯建築）による都市復興を行った。これは4階建てほどの鉄筋コンクリートによる不燃建築による再生で、メインストリートのみならず、街中の至るところまで、オープンスペースのある「中庭型都市構造」に造り変えることを目指した。最大時には、約500棟程度あったともいわれている。
- 米軍に接収された地域が概ね返還されてきた1960年から、まちづくりが本格的に始まった。当時の横浜市は、五大戦争（ごみ問題、道路渋滞、郊外、水不足、公共用地の不足）と呼ばれる問題に対処する必要があるがあった。
- そのような中、「関内牧場」と呼ばれた何も無いような場所に、人口が流入して無秩序で過密な東京のベットタウンができてしまう恐れがあった。また、東京とは異なる港町としての誇りある復興を成し遂げることが重要な課題であった。
- そこで横浜市では独自の都市づくりを1965年から本格的に始めた。復興による誇りの回復と、人口増加に対応するため、「コントロール」、「プロジェクト」、「アーバンデザイン」の三本柱による都市づくりが試みられた。
- 一つ目の「コントロール」について、無秩序な開発が行われないように、あらかじめ、緑や農地・自然を残しておくこととした。例えば、横浜市では、面積の四分の一が市街化調整区域となっている。
- 二つ目の「プロジェクト」について、通称「六大事業」と呼ばれるものを掲げて、ピンポイントで都市づくりをリードしていくこととした。例えば、自然と都市のバランスを考えた「港北ニュータウン」や横浜の歴史を活かしながら開発を進めてのちの「みなとみらい21事業」にもつながっていく「都心部強化事業」などがある（他の四つは、「金沢工業団地とシーサイドタウン」、「横浜港ベイブリッジ」、「高速道路網建設事業」、「市営地下鉄建設事業」）。
- 三つ目の「アーバンデザイン」について、横浜市では、1971年にアーバンデザインチーム（後の都市デザイン室）を編成し、それぞれの部局を調整して、魅力的な都市空間を生み出すこととした。そして、歩行者や自然、オープンスペース、コミュニティ、水辺、歴史資源、美しさを中心とした都市デザインの7つの目標を掲げた。
- 「クリエイティブシティ・ヨコハマ」として進めているアーバンデザインでは、横浜市の歴史や文化（資産）を活用して、創造性豊かなクリエイターに活躍してもらうこ

とを目指している。15年ほど継続しているが、現在、創造的な拠点を同時多発的に展開している状況にある。

- 「六大事業」を掲げたまちづくりから50年ほどが経ち、ようやくまちが完成に近づいてきた中、次の50年を見据えた構想が2009年につくられた「海都横浜構想2059」である。これは、産業構造が変化する中、従来利用していたふ頭が空いてくる時代を見据えて、未来を考えていくインナーハーバー構想である。
- 横浜市を上空から見て、リング状にまちを捉えてみると、これまで無関係と思われてきたものが実は上手くつながられるのではないかと考えることができる。例えば、工業地帯にある発電所のエネルギーをまちの中まで持って来られるのではないかとか、まちの中心部と工業地帯がつながることで新しいものづくりの発想が生み出されてくるのではないかなど。
- 他にも環境のリングや交通のリングなど、色々なものがつながることで、新しい効果、産業、にぎわいが生まれてくるということを横浜市にある大学のコンソーシアムが描いたものがこの構想である。
- そして、この構想なども踏まえつつ、2015年に横浜市が策定したものが、「都心臨海部再生マスタープラン」である。先に構想していたリングの全てが反映されているわけではなく、マスタープランの取組もこれからだが、将来的なことを先に少し考えておくことで物事を描きやすくなることもあり、構想することは大切である。
- 都市空間を構想することは、色々な人が集まって未来を考えていくとき必要となる共有ツールである。そして、ビジョンとアクションを連動させながら、思い描いたものを実行していくことが必要になる。さらに、個々に展開しているタクティクス（戦術）を大きなストラテジー（戦略）の中に納めていく工夫も大切である。また、危機の時に、何かを単に元に戻そうとするだけでなく、ビルドバックベター（復興でよりよい社会へ）という姿勢を持つことによって危機を乗り越えていくこともできる。



5. 質疑応答

(1) Q: 港北のニュータウンにおける新しい取組があれば教えてほしい。

A: ニュータウンの構想自体は 60 年代から行っているが、概ね形が見えてきたのは 80 年代以降だと思う。よって極端に古いわけではない。東京から近い北部の地域にあることもあり、人口自体はあまり減っていない。ただ横浜市 of 南部の方、東京から遠い地域は人口が高齢化していきている。私は、別の相鉄線沿いの郊外住宅地（南万騎が原）において、ニュータウンがオールドタウンにならないようにする「ニュー・ニュータウンプロジェクト」に携わっている。新型コロナウイルス感染症の影響で、地元を見直そうという人が増えているので、そういった人達が活動できる場をまちの中に挿入していこうという活動を進めている。まだビジョンと呼べる段階には至っていないかもしれないが、ベットタウンをまちにしていこうということを考えている。

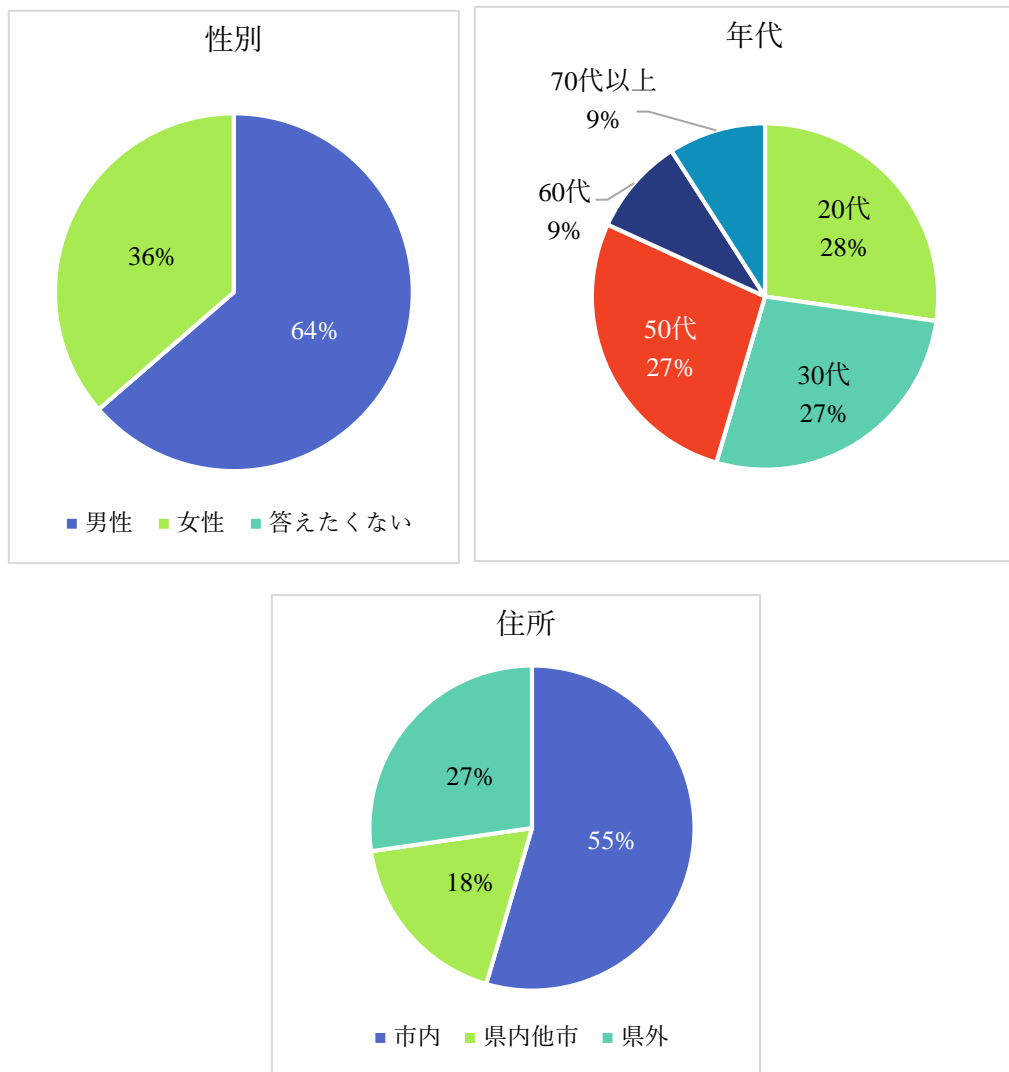
6. まとめ

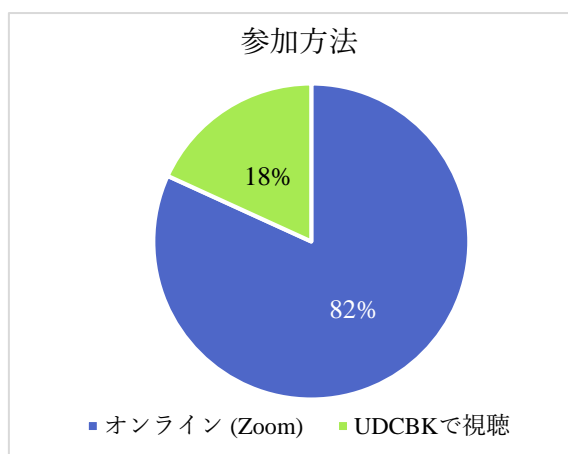
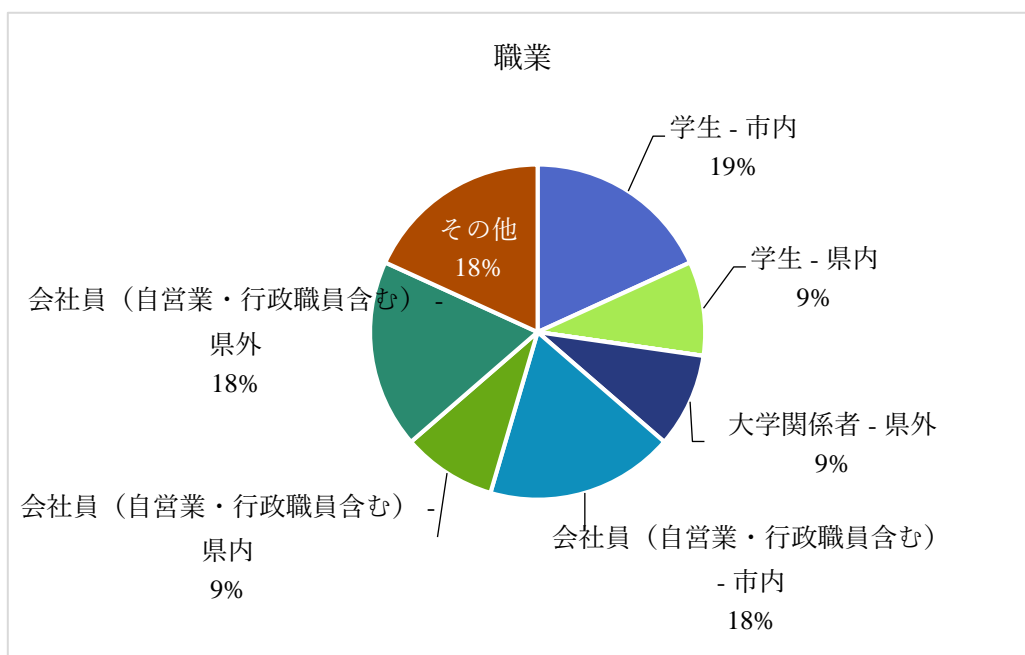
- 都市において多様な主体が存在する中、皆が将来に向けた思いを重ね合わせ、将来の方向性を定めていく上で、都市の構想（ビジョン）は重要である。
- 思い描いたビジョンと具体的なアクションを両輪として連動させていくことが必要となる。その中で、役割を担っていくのが多様な主体のプラットフォームであるアーバンデザインセンターである。
- UDCBK においても、公民学の様々な主体と描いた「都市と交通」プロジェクトのイメージ図を元に、活動を展開していきたいと考える。

7. アンケートまとめ

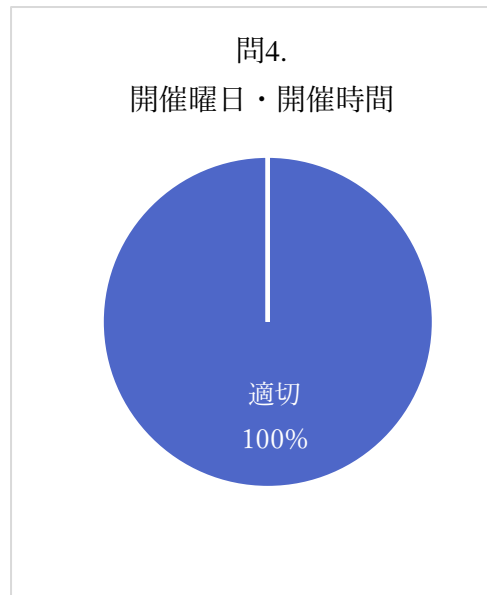
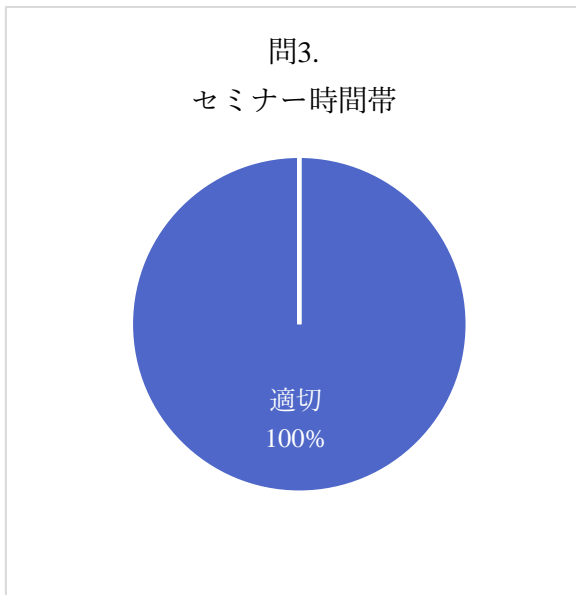
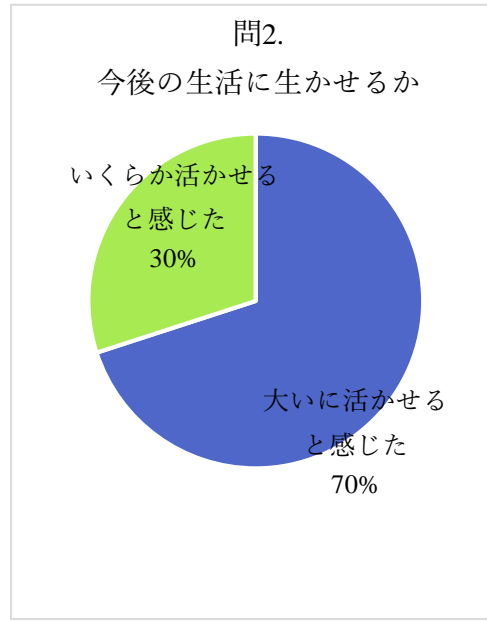
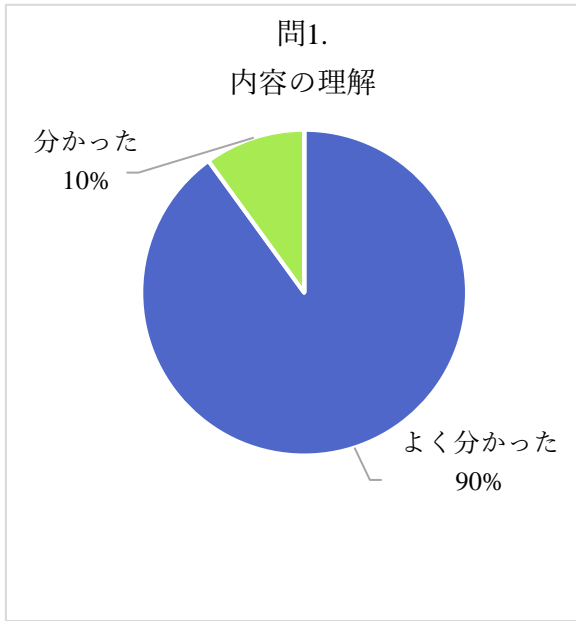
(1) 参加者属性

参加者 23 名のうち、アンケートに回答いただいた方は 11 名、回答率は 48%だった。





(2) 内容について



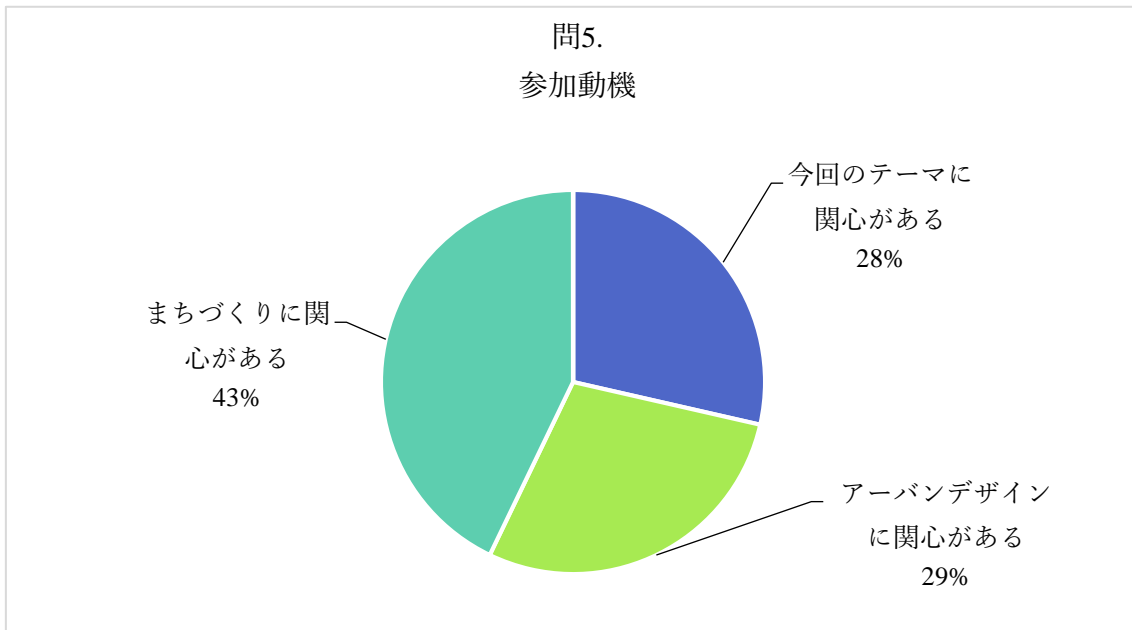
【自由記入欄回答】

問3. 時間はどうでしたか。

回答なし

問4. 開催曜日、開催時間は適切でしたか。

回答なし



【自由記入欄回答】

問 6. それぞれに関心のあるテーマについて御自由に記載ください。

- 縮小都市におけるまちづくり・都市計画。(20 代男性)
- まちづくりについて、興味があります。(30 代女性)
- アーバンデザインについて、20 年先をみたまちづくりについて、交通や福祉の面からみたまちづくりについて、多様な意見をもった方との意見交換の機会や専門的な知識の得られる機会の提供 (UDCBK の今回のセミナーのような) をコロナ禍においても継続することの意義を感じます。(50 代女性)
- 若い人の発想と行動を活かしたみなくさライブラリー「ゆめほんDAY」や Design Factory のベンチを利用した 3 m²からはじめるまちづくりなど (50 代男性)
- みなと大通りの社会実験に興味がある。(想定していない利用があったこと) アスファルトアートはおもしろそう。“歴史的な建物をクリエイティブに”というのがおもしろそう。(言っていないかもしれませんが) (30 代男性)

【自由記入欄回答】

問 7. 今回、印象に残ったこととその理由をお聞かせください。

- 横浜の歴史を初めて知りましたが、「横浜が常に未来を見続けている都市」の理由が分かった気がしました。あと、クリエイターがたくさんいるから、街があんなに魅力的に見えるのかとも合点がいきました。クリエイター以外にも、どんな人々がいると

街が活気づくかは気になります。(30代男性)

- 同時多発的にアクションを起こしても、ビジョンが共有されていれば向かうべき方向性がブレない。街全体でビジョンを共有することが大切だと理解した。(20代男性)
- 全ての内容が具体的で、区切り区切りで、整理しながら話して頂けたので、とても良く理解できた。なかでも、「POWERS OF TEN」や「おたクリエティブタウン構想」についてのお話はとても興味深く、印象に残った。理由は、まちづくりの視点がとても良くわかる内容であり、草津市のまちづくりにも、活かせてもらえるといいと感じたから。(60代女性)
- 人口減少と高齢化が進む日本において、都市部と、地方に残る町や村の両方について、アーバンデザイン・まちづくりの事例を挙げていただいたので、比較にもなり勉強になりました。ビジョンの共有とアクションの立案・実行、スピード感を付加する場合、ビジョンに沿った小さなアクションを同時多発的に起こしていくことも効果的であること、社会変革スピードが加速する中で、有効な手法であることが分かりました。
(30代女性)
- 印象に残ったこと
 - 1) Power of 10 (でしたか?)
どの位置から見ているかを意識することが大切
理由 個人 家庭 町内会 学区 市 県 国 地球
「どこから見てもこう動きたい」を求めていきたいと思いました。
 - 2) 社会実験 (ウォークアブル)
やってみると色々なところから化学反応がおこる
理由 先日金先生の地域課題解決に向けた調査の発表をお聞きしました。
学生と地域住民が協力して社会実験が出来るといいですね。
お互いに学びあえると思います。(50代女性)
- 人口減少など縮減時代を考えながらまちの将来をイメージする。20年後の南草津を考えたワークショップを思い出した。(50代男性)
- 南草津ビジョンの推進の仕方に参考になると及川先生がおっしゃっていたが、草津駅の方にもビジョンを作っていきたい。(30代男性)